

## ⑦美女連環の計

第八回

反董卓連合軍が分裂すると、董卓の専横は増すばかりであった。かつて、曹操に宝剣を渡して董卓の暗殺を謀った王允は、歌伎（歌姫）の貂蟬を使い、二人の仲を切り裂いた。董卓は、呂布に裏切られて殺される。

毛宗崗本は、第八回の冒頭に、前漢・後漢功臣たちが描かれている麒麟閣や雲台に、貂蟬を描くべきと褒め称えている。

【貂蟬という女子を、どうして麒麟閣や雲台に描いて、後世まで名を知らしめようとしなのか。最も恨めしいことは、今の人がでたらめに伝えている、関羽が貂蟬を斬るという話である。そもそも貂蟬には斬られるべき罪はなく、むしろ褒め讃えられるべき功績があるのであって、ここにそれを特別に記しておくことにした。】（第八回総評）

『演義』で貂蟬の身分と設定された歌伎は、妓女と同様、貞節はあまり求められない。これに対して、『三国志平話』などに残る貂蟬は、呂布の妻とされており、その場合には関羽によって斬られている。妻であれば、不貞は許されず、貂蟬が斬られることもやむを得ない。歌伎であれば、不貞という悪事が追求されにくい。しかし、それだけでは、毛宗崗本が貂蟬を手放しで礼賛する理由には物足りない。不貞の罪を補って余りある行為を毛宗崗本は貂蟬に認めたのである。

## ⑧曹操の不義

第十八回

董卓の死後、李傕や郭汜と共に政権を握った張済の族子である張繡は、戦死した張済の軍勢をも配下に治め、荊州の宛城に駐屯していた。建安二（一九七）年、曹操が南征して清水に軍営を置くと、張繡は降伏した。しかし、曹操は、亡き張済の妻鄒氏に溺れたため、宛城の戦いで、長子の曹昂・甥の曹安民のほか、典韋を戦死させるほどの大敗を喫する。鄒氏は、史実では、略奪されて曹操と関係が結ばされた悲劇の女性である。ところが、毛宗崗本は、鄒氏を淫乱な女性に書き換えるため、曹操との会話を次のように描いている。

「今日、あなたにお会いできたのは、天が与えてくださった幸せ。今宵は枕席をとみにいたし、わたしと一緒に都に帰って、富貴で安楽な暮らしをしようではありませんか。いかがです」。鄒氏は拝謝してそれに応じ、この夜は曹操

と寝所をともにした。（第十八回）

李卓吾本では、曹操は、「必ず夫人（鄒氏）を正室としよう」との口説き文句で関係を結ぶ。それを毛宗崗本は、「富貴で安楽な暮らしをしよう」と言って、関係を結んだことに書き換えたのである。これにより、鄒氏の人物像は大きく変化する。

寡婦との不貞は、最終的に妻を迎えるならば、明清時代の社会通念では、それほど責められることではない。李卓吾本の曹

後漢が滅亡しようとしている時、貂蟬は自らの身を穢すことで董卓を打倒して、漢を守った。妻妾よりも身分の低い歌伎であっても、国への思いを抱くことはできる。貂蟬は、漢のために、その身を穢して大業を成し遂げた。毛宗崗本は、第一に貂蟬の行為を漢への義を尽くしたものと捉え、高く評価しているのである。

また、貂蟬は王允に向かって次のように言っている。

貂蟬は、「わたくしは旦那様から深いお情けを受け、歌舞を習わせていただき、我が子のように礼によって面倒をみていただきました。わたくしはこの身を粉にしても、万分之一のご恩返しすらできないと思っております。……もしわたくしに何かできることがございましたら、わたくしは死ぬことも厭いません。」（第八回）

貂蟬は、王允が「礼」により我が子のように自分を育ててくれたので、その恩返しができるならば、命をも投げ出す覚悟です、とその動機を語る。「美女連環の計」の実行は、貂蟬の育ての親の王允に対する「孝」の発露であり、王允への報恩を形にしたものであった。毛宗崗本の高い評価は、第二に貂蟬の行動を育ての親に対する孝の実践と捉えたことに基づく。

毛宗崗本は、「美女連環の計」で董卓を倒した貂蟬を漢への「義」、王允への「孝」を尽くしたものととして、高く評価しているのである。

操は、たとえそれが鄒氏を落とすための偽りであったとしても、鄒氏を「正室」にする約束して関係を迫っている。これを履行すれば、曹操もその不貞を責められることはなく、鄒氏もその淫乱を責められることはない。李卓吾本の曹操は、まだ救われる余地があった。

ところが、曹操を「奸絶」として表現したい毛宗崗本は、鄒氏を寡婦でありながら「富貴で安楽な暮らし」のために身を差し出す淫乱な女性に書き換えた。ここでは、鄒氏は妻として娶られることを約束されていない。こうして鄒氏を淫乱な悪の女性として描いたうえで、毛宗崗本は、鄒氏に溺れたことを曹操大敗の原因としているのである。

鄒氏が「曹操と寝所をともにした」という本文に、毛宗崗本は、【郭汜の妻は嫉妬により、張済の妻は淫乱により、ともに悪の報いを受ける仲間である】と評をつけている。李傕と郭汜の分裂の原因となった郭汜の妻の嫉妬と並べ、鄒氏の淫乱を批判するのである。そして、鄒氏に溺れる曹操には、【曹操のような奸雄も、こうして遊び楽しんで、帰ることを忘れ有頂天になる。色欲が人を惑わせることは甚だしい】と評をつけている。少数の兵で多数を破る兵法の達人である曹操でも、不貞という女性の悪に嵌まった場合には、長子を失うほどの大敗を喫する。毛宗崗本は、嫉妬と不貞を女性の二大悪と考え、曹操の敗れた理由を説明しているのである。